

歌詞へのこだわり

私のような者が、先日兵庫県の功労賞（教育部門）を受賞いたしました。それほど兵庫県の大学教育に貢献したとは思いませんが、名誉なことなのでお受けしました。

その授賞式の開会の辞に続いて「国歌 君が代斉唱」「ご起立のうえ前奏に続いてご唱和下さい」と言う司会者の言葉で全員が厳かに歌いました。

どこかの学校で起立を拒否したり、歌うのを拒んで教育委員会から処分されたりと教育現場ではやっかいな「君が代」なのですが、メロディがいけないという意見は何故かどこからも出ません。右翼の街宣車はメロディだけを流して街を走っているのですが聴く人は歌詞が省略されているので何番の歌詞で君が代が演奏されているのか判りません。

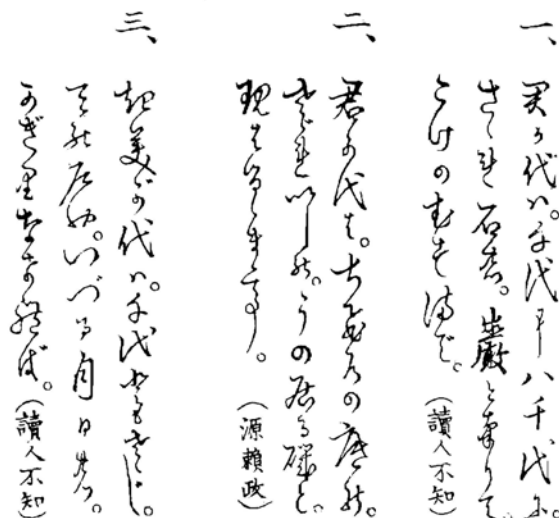
「えっ？ 君が代の2番はどんな歌詞だったっけ？」と焦った読者は正直です。昔中学生に卒業式の式歌の練習をさせていたとき、君が代は「さざれ」と「石の」で区切って歌わないように指導したりして、結構難しいものだったのだと思いつつも歌えるようになったので、「よろしい。それでは2番歌ってみよう」というと、「・・・・・・」となる。「どうした？ 歌えないのか？」と訊くと、「忘れしました！」と来る。忘れたも何も聴いたことも歌ったことも無いわけだから「忘れしました」はおかしい。

さて次に示すのが君が代の1～3番です。

- 1, 君が代は 千代に八千代にさざれ石の 巖となりて
こけのむすまで (詠み人知らず)
- 2, 君が代は ちひろの底のさざれ石の うのある磯と
現はるゝまで (源三位頼政)
- 3, 君が代は 千代ともさゝじ天の戸や いづる月日の
かぎりなければ (皇太后宮太夫俊成)

これは実際に歌われていた（明治21年4月25日発布）ものですが、国歌としてではなく何と「保育唱歌」だったのです。後にこの君が代という保育唱歌の一番だけを国歌として取り敢えず歌うことになった（明治26年8月12日）ようですが、とにかく諸説（それぞれが都合の良いように）乱れ飛び中で大村芳樹の「音楽の枝折り」について研究した私の研究同人であった田中準先生の資料が最も信頼出来そうです。何とそこに書かれた君が代の最後の小節の音はミスなのかそれがオリジナルなのか今のもの

とは違います。（楽譜より毛筆の歌詞がきれいと言うことは楽譜の重要性がそれほど高くなかったと言えます）



要するに目くじら立てて平和論に結びつける程のことはこのいい加減なメロディや歌詞では無いということです。それでも、歌詞に拘るのは我々日本人のDNAは「器乐的」側面よりも「文学的」なことを重視するようになっていくからでしょうか？

雅楽の越天楽は平調で演奏される器楽曲と思われがちですが、オリジナルは「今様（いまよう）」という流行歌だったのです。「春のやよいの曙に四方の山辺を見渡せば・・・」という歌詞の流行歌が、経費節減でリストラされた雅楽団の大衆に媚びるレパートリーに加えられ、器楽曲となり、江戸時代には琴、尺八、三味線の三曲合奏の曲にもなり、挙げ句の果てに「黒田節」という民謡に形を変えてリバイバルしたのを見ればそんなDNAは無いようです。イタリア語が判らなくても原語でオペラを観る行為や何語か判らない合唱曲でコンクールに出場するのがはやりのこの国の文化はひょっとしたら器乐的なのかも・・・